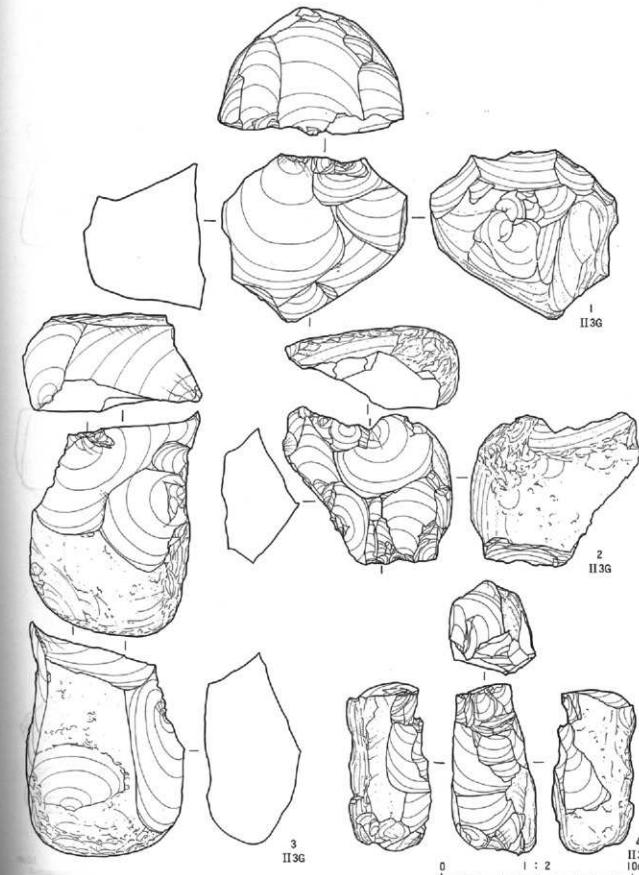
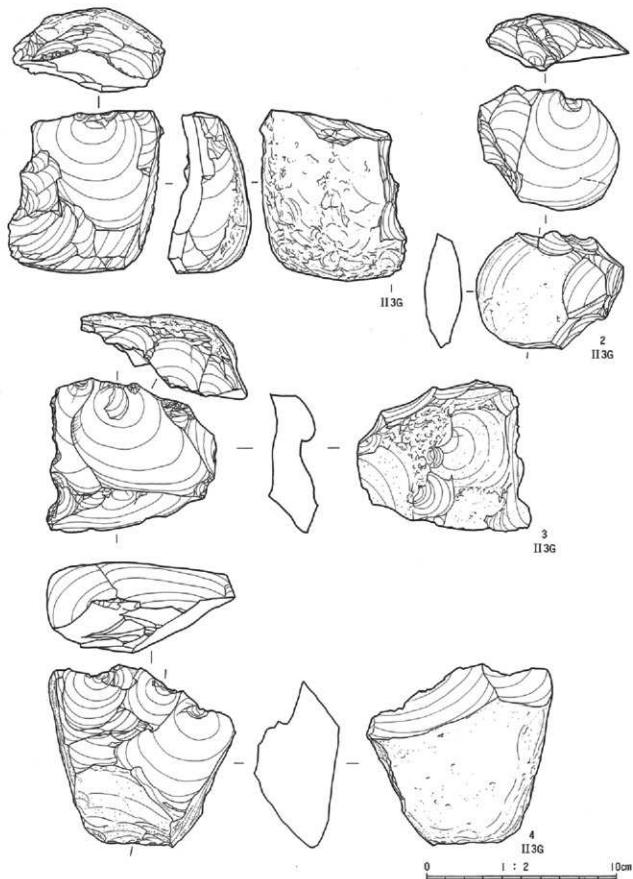


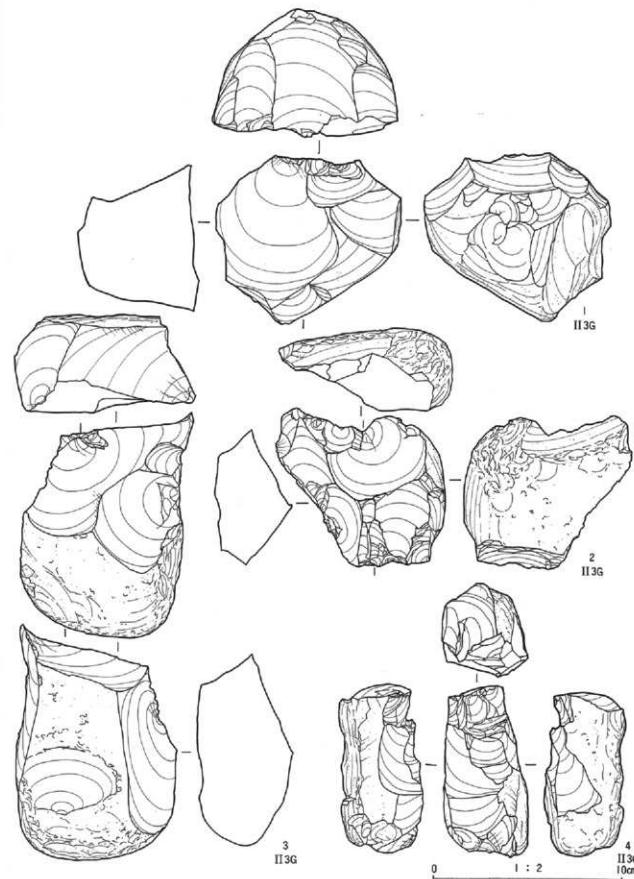
第48図 石器実測図 (34)



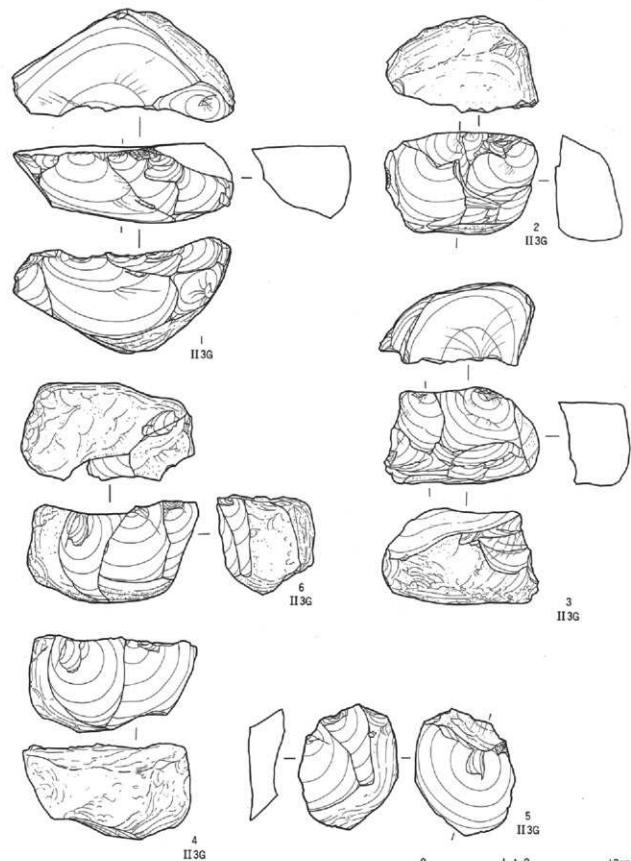
第49図 石器実測図 (35)



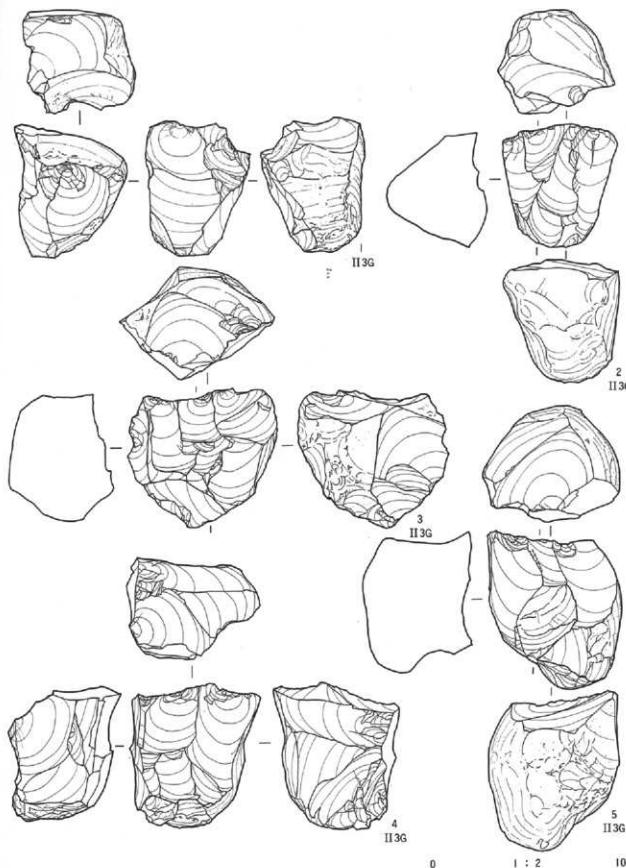
第48図 石器実測図 (34)



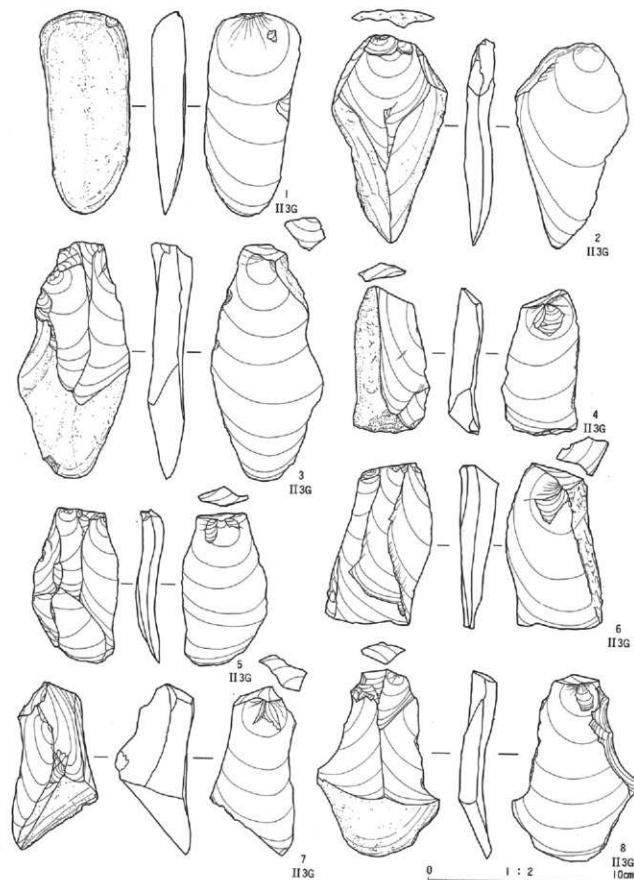
第49図 石器実測図 (35)



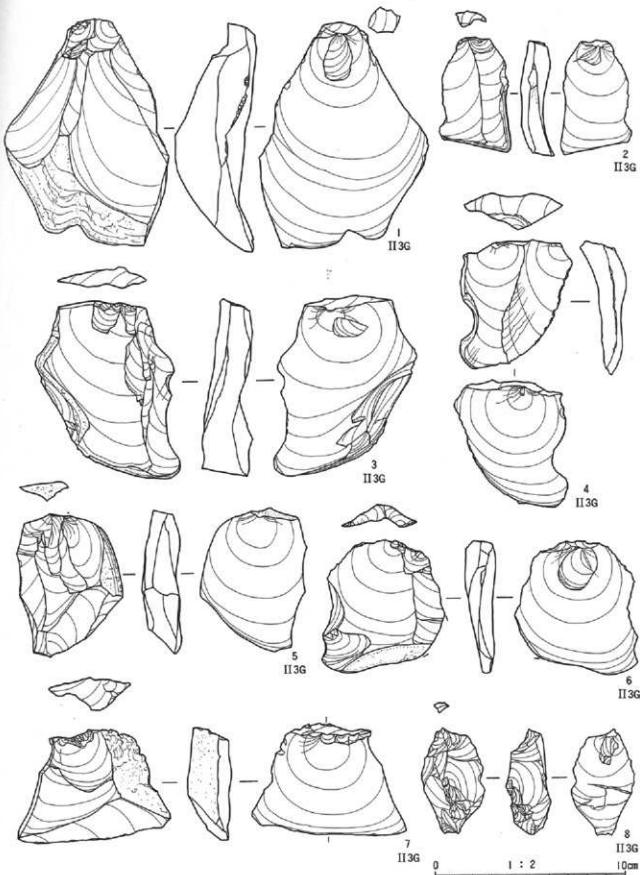
第50図 石器実測図 (36)



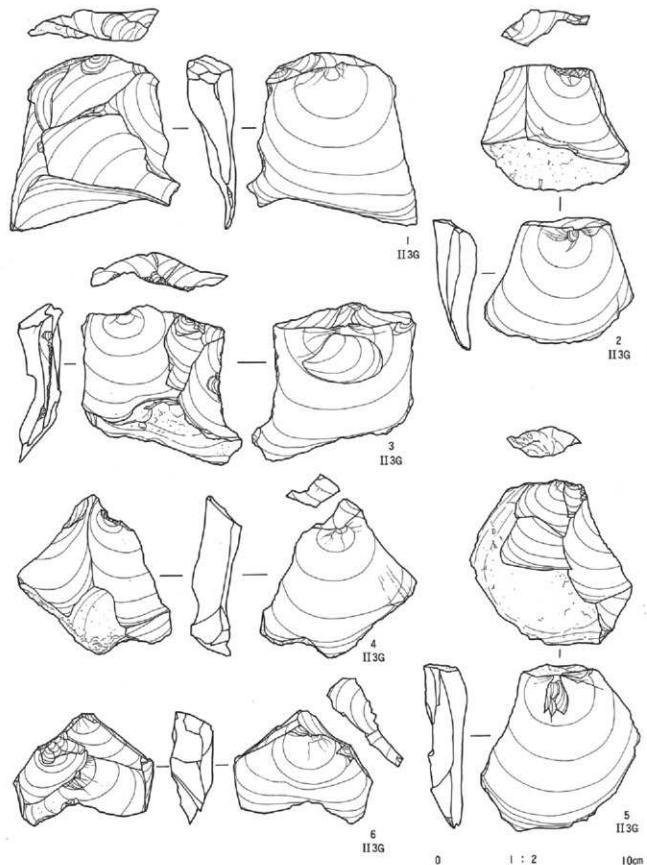
第51図 石器実測図 (37)



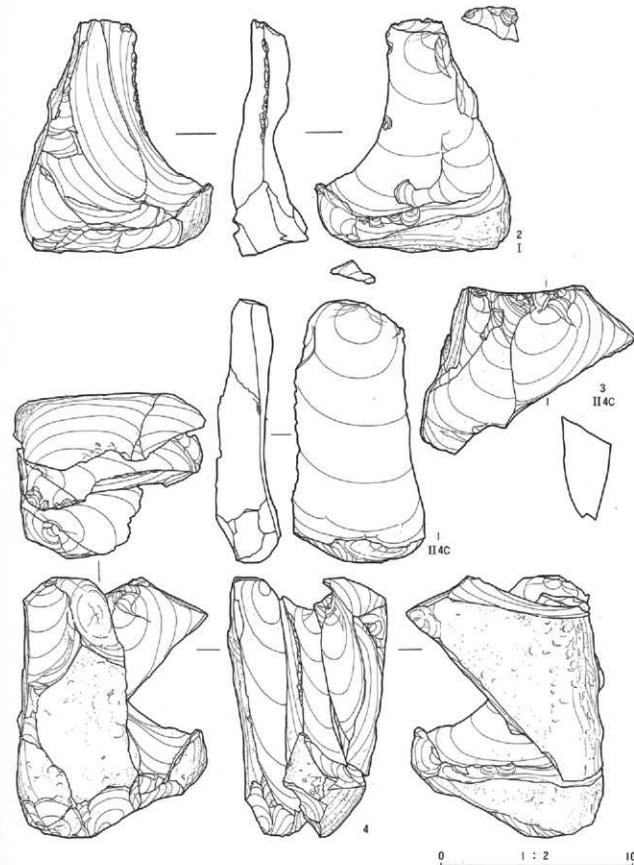
第52図 石器実測図 (38)



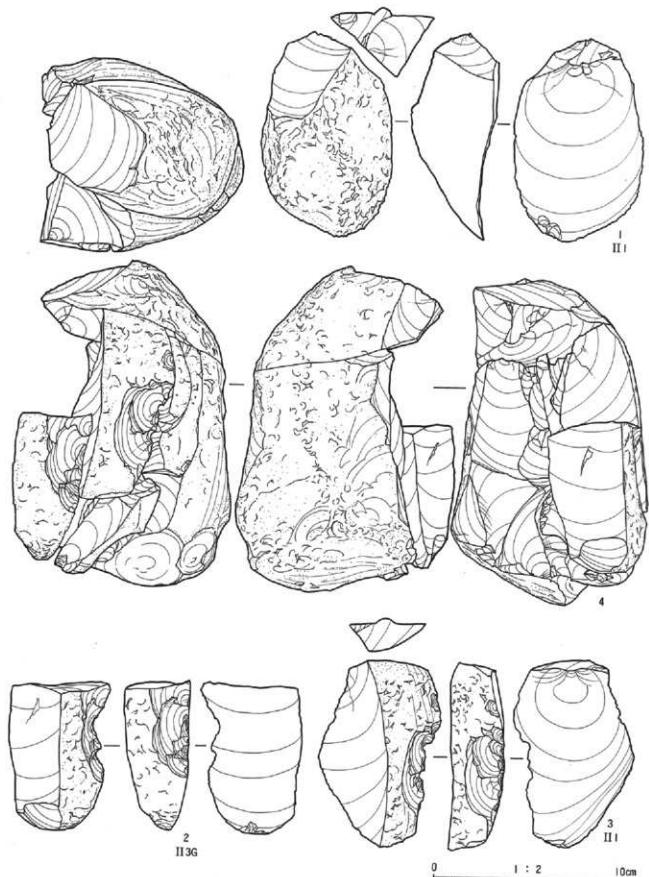
第53図 石器実測図 (39)



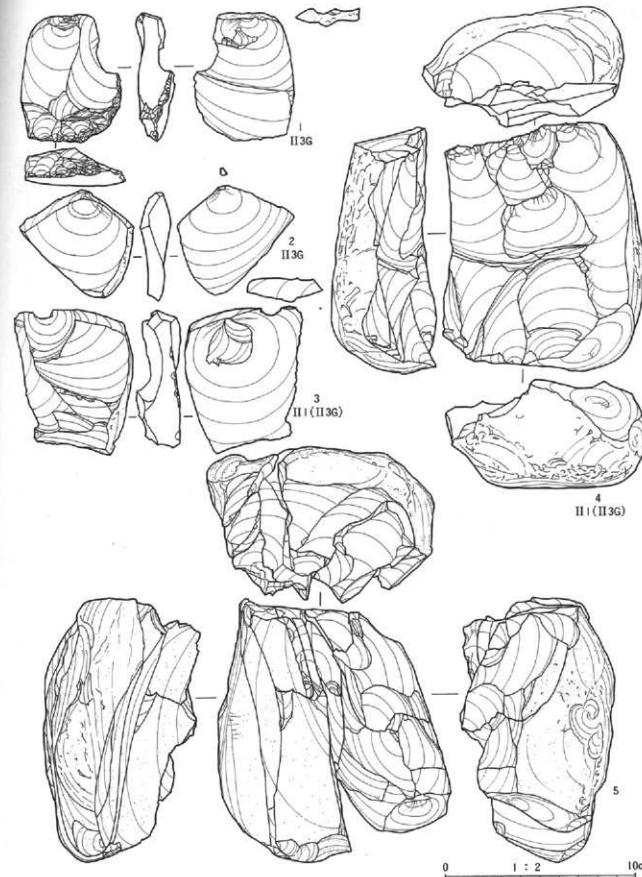
第54図 石器実測図 (40)



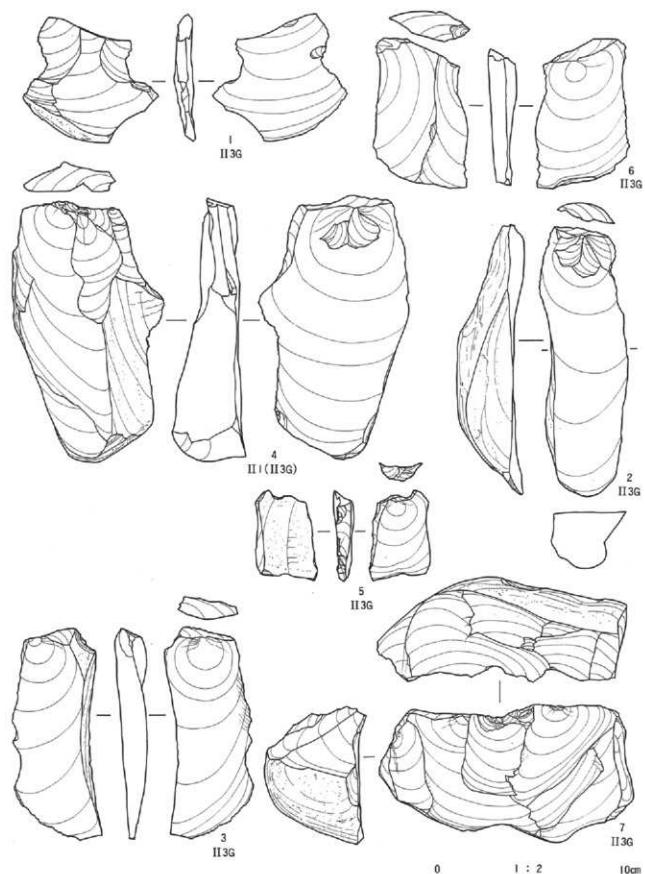
第55図 石器実測図 (41)



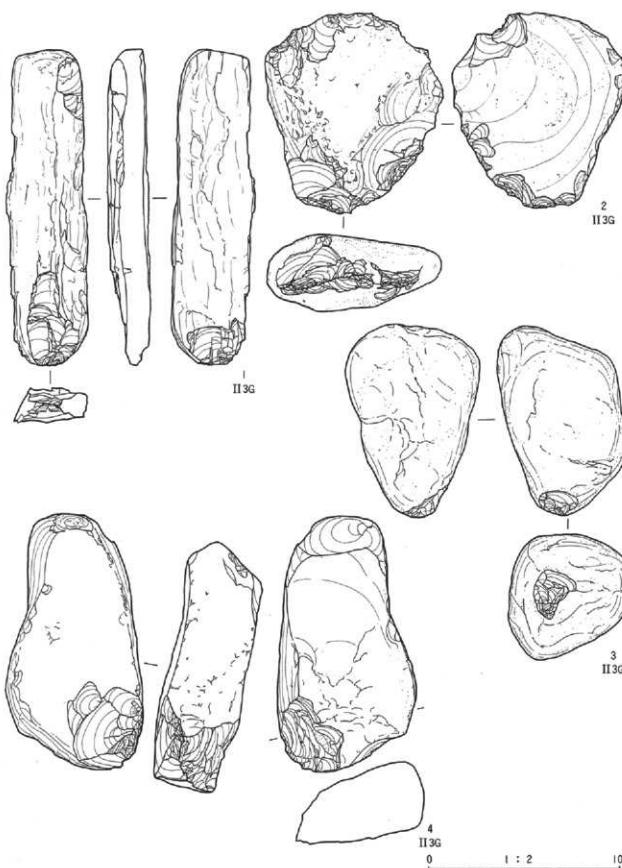
第56図 石器実測図 (42)



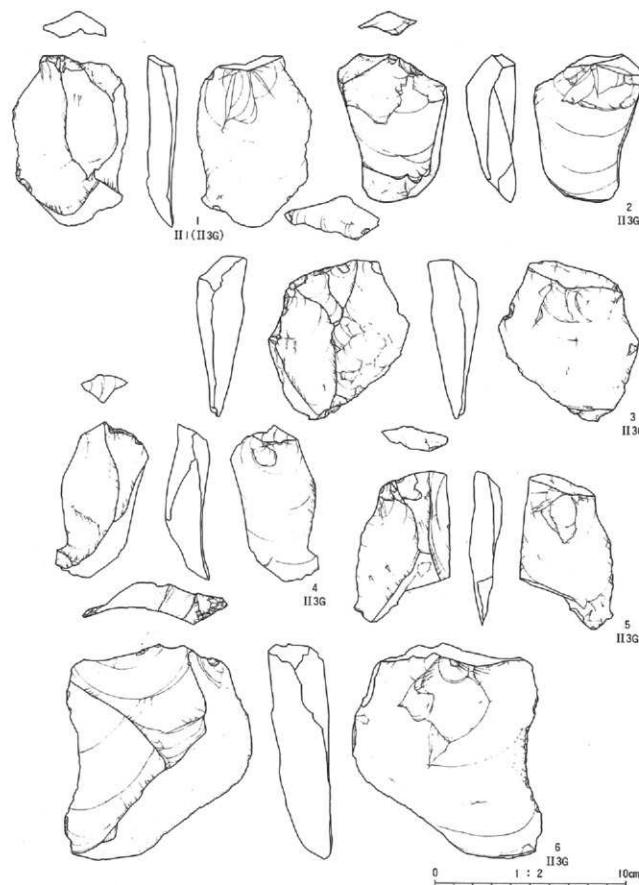
第57図 石器実測図 (43)



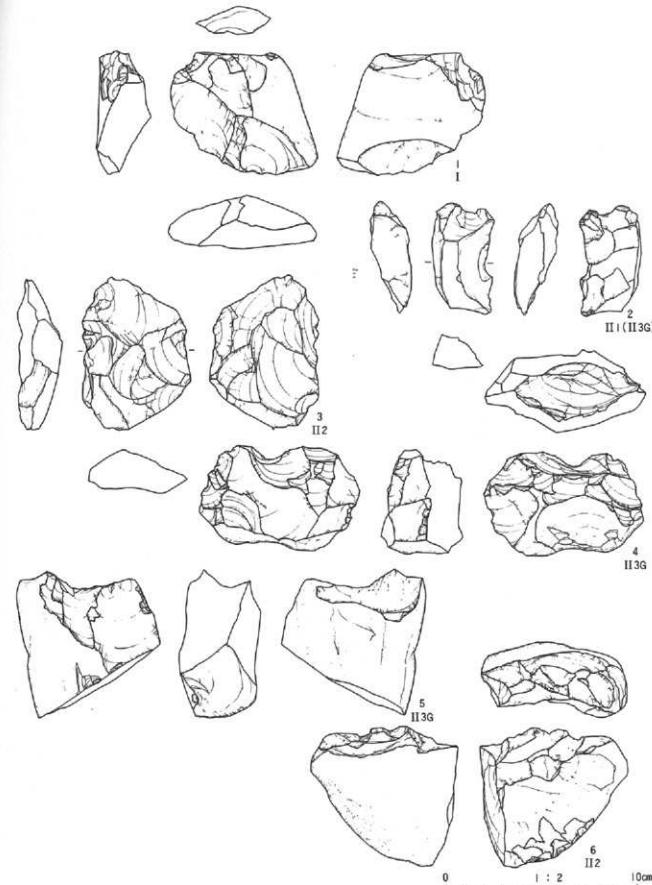
第58図 石器実測図 (44)



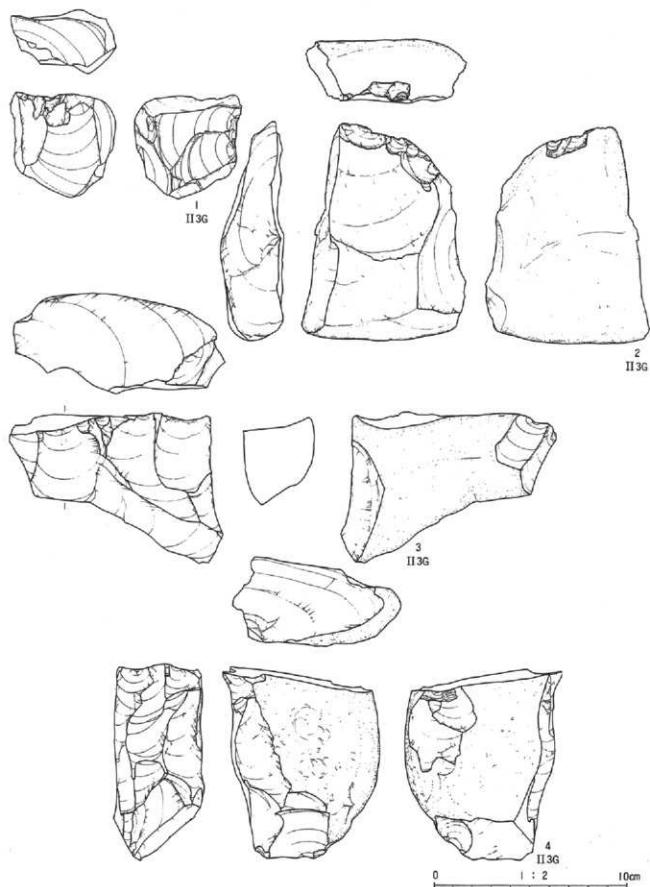
第59図 石器実測図 (45)



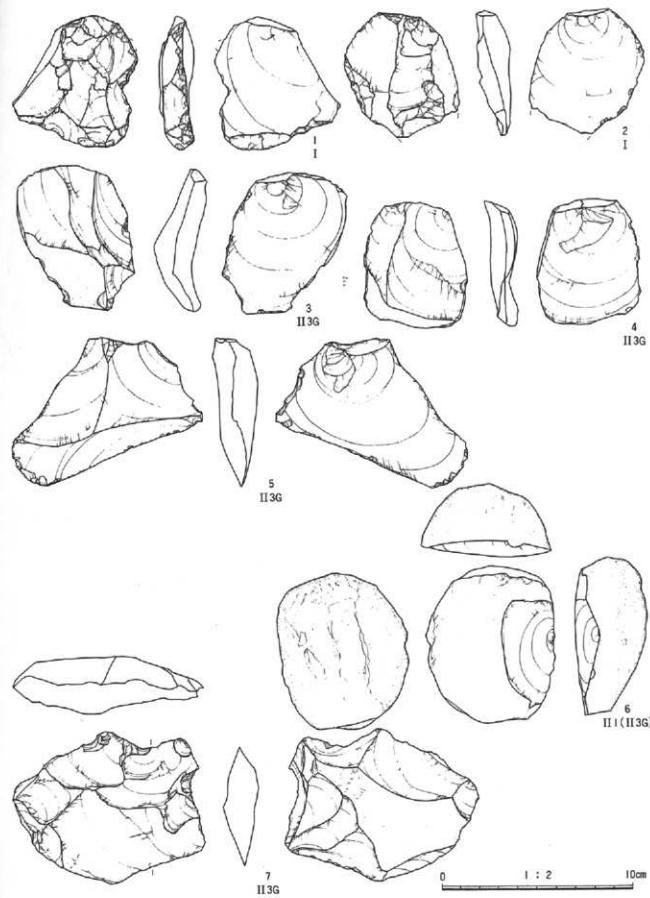
第60図 石器実測図 (46)



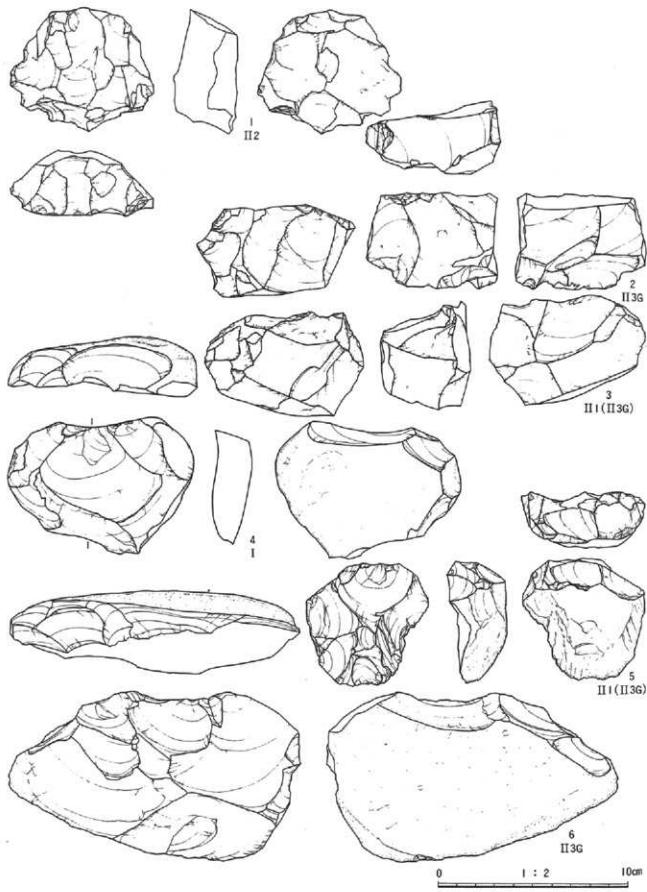
第61図 石器実測図 (47)



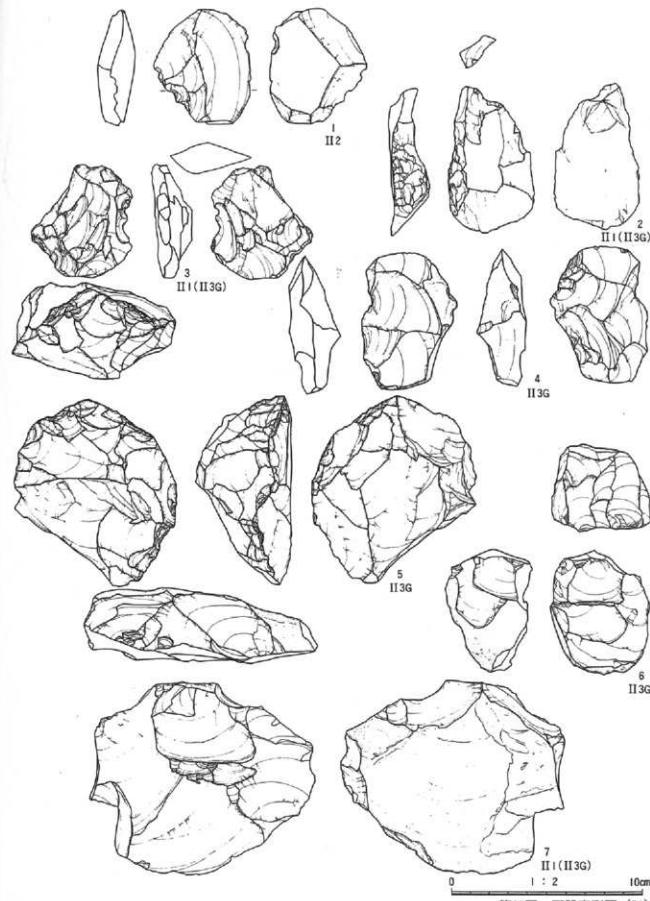
第62図 石器実測図 (48)



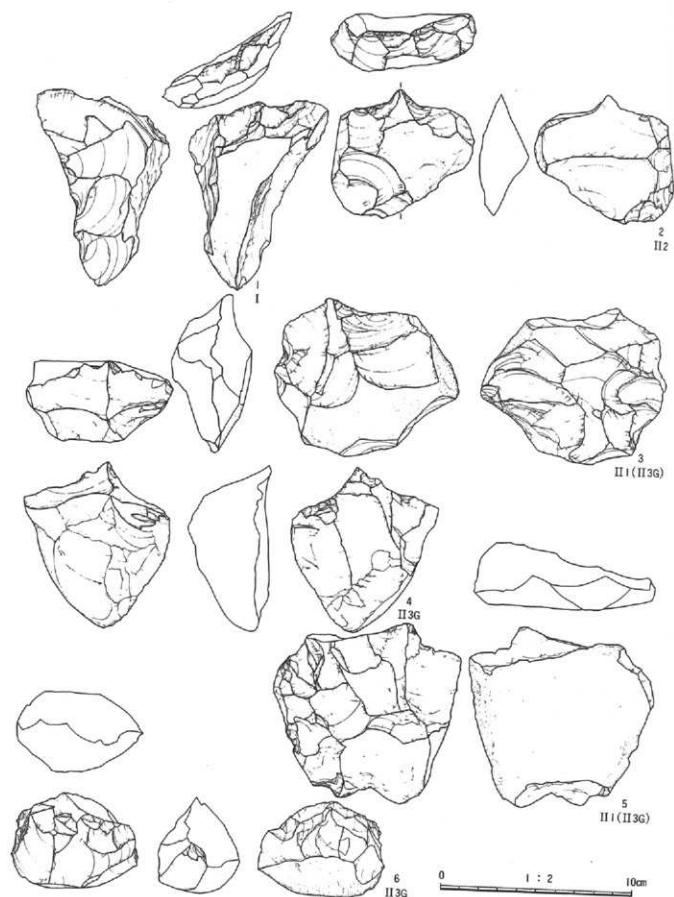
第63図 石器実測図 (49)



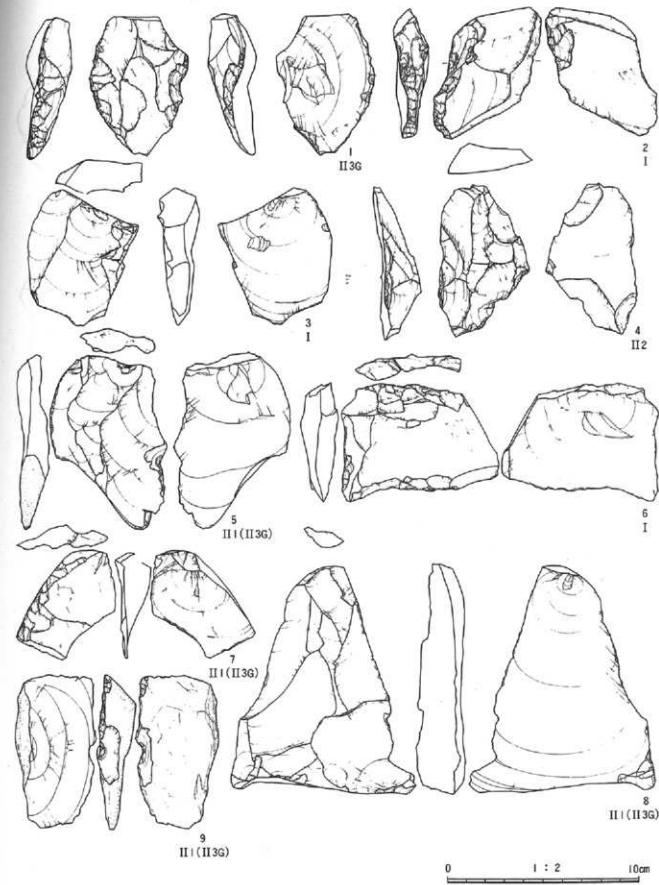
第64図 石器実測図 (50)



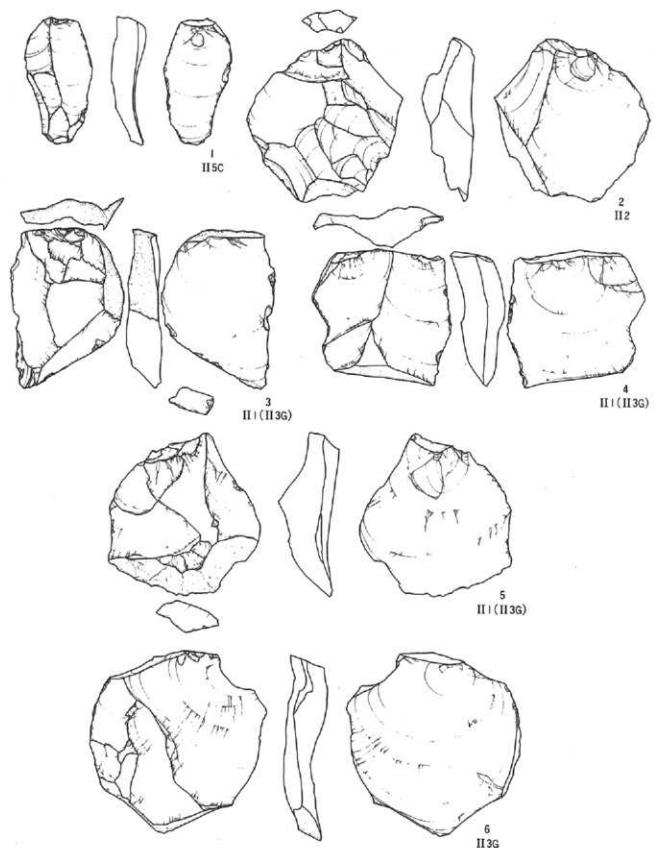
第65図 石器実測図 (51)



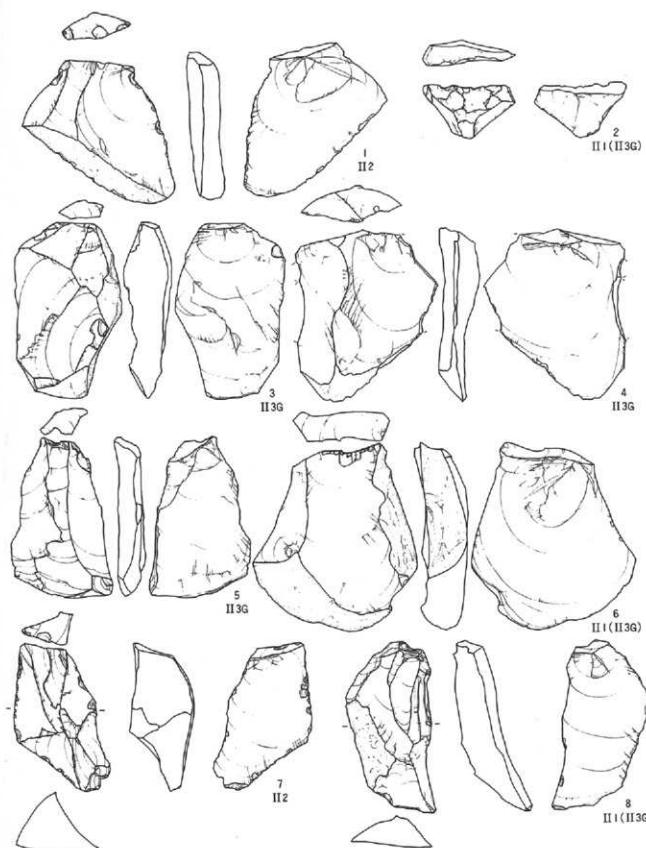
第66図 石器実測図 (52)



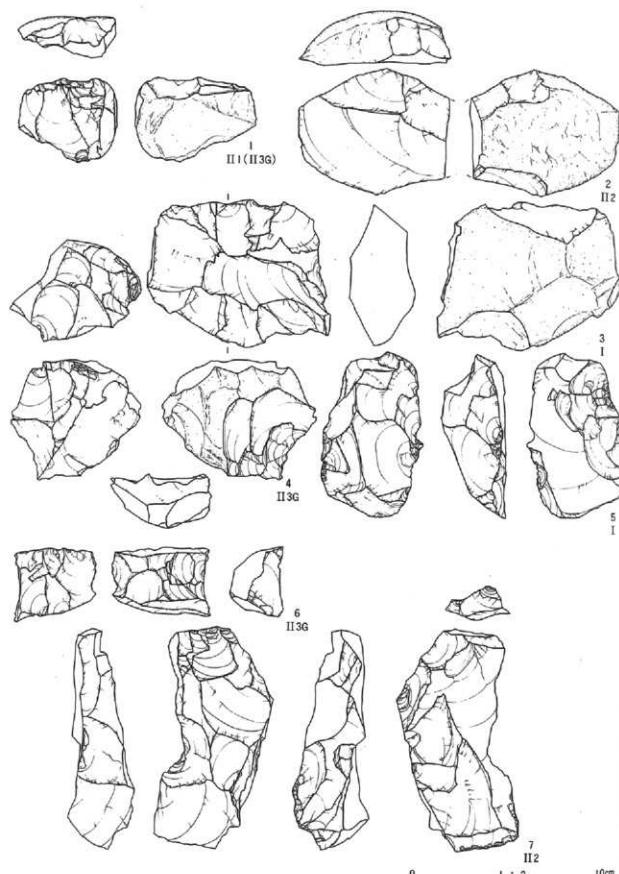
第67図 石器実測図 (53)



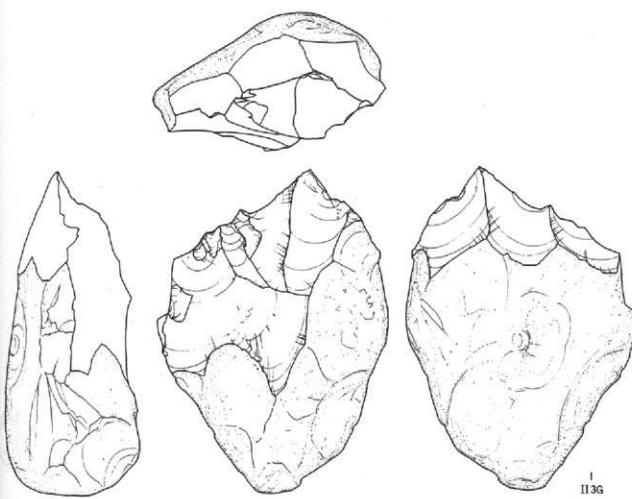
第68図 石器実測図 (54)



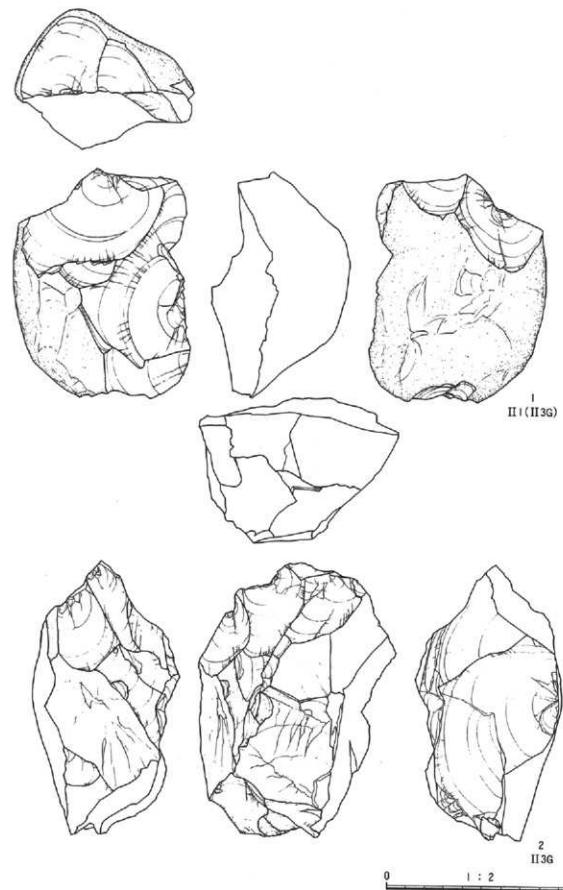
第69図 石器実測図 (55)



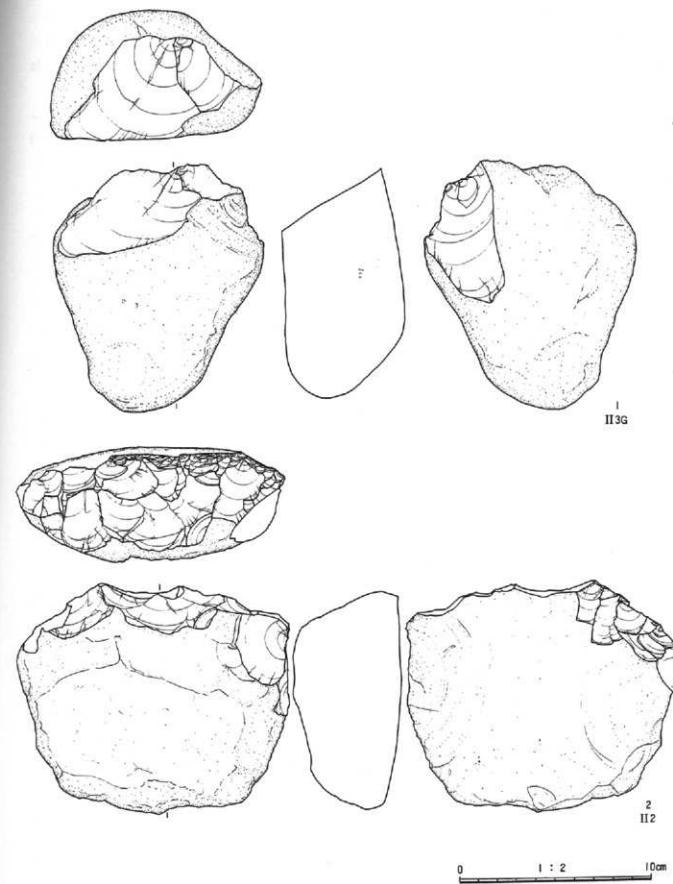
第70図 石器実測図 (56)



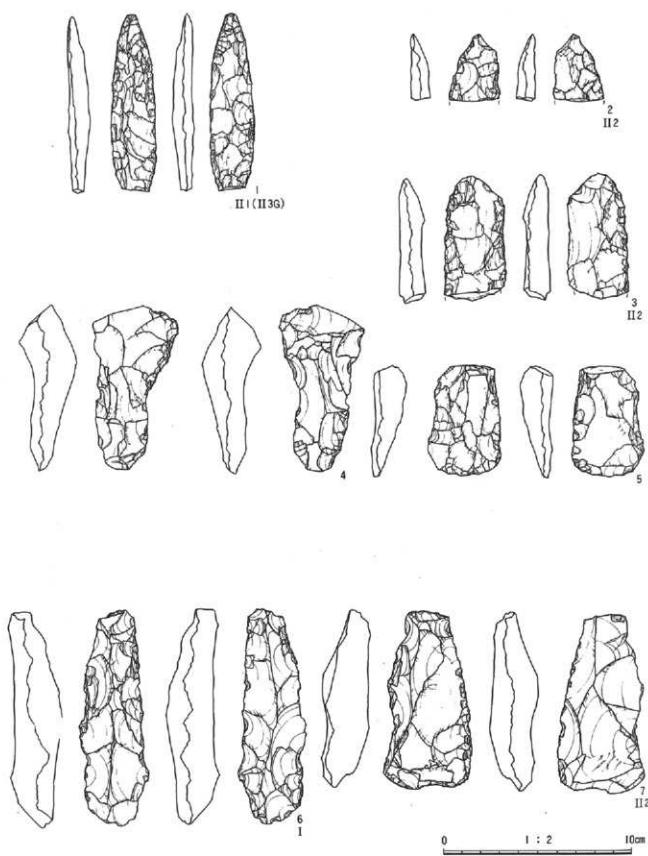
第71図 石器実測図 (57)



第72図 石器実測図 (58)



第73図 石器実測図 (59)



第74図 石器実測図(60)

## 4 II 2・II 3 C層出土の石器

II 2層は前述のように、層自体が二次堆積であるために石器自体の原位置は保たれていないが、II 2層中より出土した石器はII 3 G層から出土した石器とほとんど同じ様相である。

II 3 Cからも石器が出土している。今回図示したのは第33~34図の接合資料の剝片であるが、これはII 5 C層の存在が分かる以前に取り上げたもので、II 5 C層の可能性があるので、第76図に示した範囲の中の石器は図示されていない。

## 5 II 4 C層出土の石器

II 3 G層について多く出土している。おもに、第78~88図に示した。接合資料が出土していることから、この層でも石器の製作を行っていたことが明らかである。剝片剝離技法は第55図にあるように、縦長素材の場合は打面を作り出して剝片を剝離し、剝離された剝片に加工を加えるという、基本的にII 3 G層の石器の剝片剝離技法と同じである。II 3 G層出土の頁岩に比べて、やや緻密な頁岩を用いている石器があり、石質の違いが見受けられる。また、定形石器と不定形石器の割合で、II 3 G層出土石器と比べると、定形石器の割合が多く、不定形石器の割合が少ない。II 4 C層にのみ見られる器種として86-4・88-1のような深面を残した円形器がある。

## 6 II 5 C層出土の石器

石器集中地点4の完掘後に、さらに掘り下げたら確認出来た包含層で、第92~97図に示した。特に、I~J-22~24グリッドに関しては出土遺物のすべてについて平面図と絶対高の記録を行った。調査当初から斜面に遺跡が立地しているために、常に二次堆積の疑いがもたれてきたが、その後I~J-22~24グリッドのII 5 C層に関しては、傾斜が比較的緩やかでしまが強く、II 3 G層に切られていることから、今回の調査区の中では一番安定していると考えたからである。

この層出土石器の特長は、石器自体の大きさがII 3 G層やII 4 C層と比較すると小形であることである。これは、石材環境の違いによると思われる。II 5 C層が地表化していた時には、石器石材の供給源となるII 3 G層の堆積はなかったと考えられ、そのため頁岩の原石が入手しにくかったことが考えられる。このため、同じ遺跡でも、石材の豊富な状態（II 3 G層）では、原石自体が大きいので剝片も大きい。また背面や先端部に表皮がついている剝片や石核を見ると、原石の大きさの割には多くの剝片が剝離されていないことが分かる。また、石材が豊富でない状態（II 5 C層）では石材が小さいので剝片も小さい。また、表皮のついていない剝片が多いことから、II 3 G層の石器群よりは効果的な剝離が行われていたことが考えられる。

そのほか、94-7・97-16や96-1のように両極打法による剝片や石核が見られる。96-2・3は縦長の剝片が接合しているが、これは剝離された剝片に二次加工が見られず、剝片の幅や厚みにばらつきがあるので、剝片を剝離するためのものではなく、97-15を目的とした剝離であると考えられる。

### 7 出土石器の報告書取り扱いについて

「石器」の用語に関しては、石核・剝片・t o o l・ハンマーなどを含んだ広義の意味で使用した。IV-2で行った器種分類のほかに、便宜的に以下の意味でそれぞれの用語を用いた。無加工で、石器素材になりうる礫を原石、最終剝離面のバルブが凸形で、背面・腹面に加工や調整が見られないものを剝片、剝片剝離の最終面のバルブが凹形で、剝離面に調整や加工のみられないものを石核、使用・未使用は不明だが、一定の分類基準のもとに、分類（器種分類）を行えるものをt o o lとした。

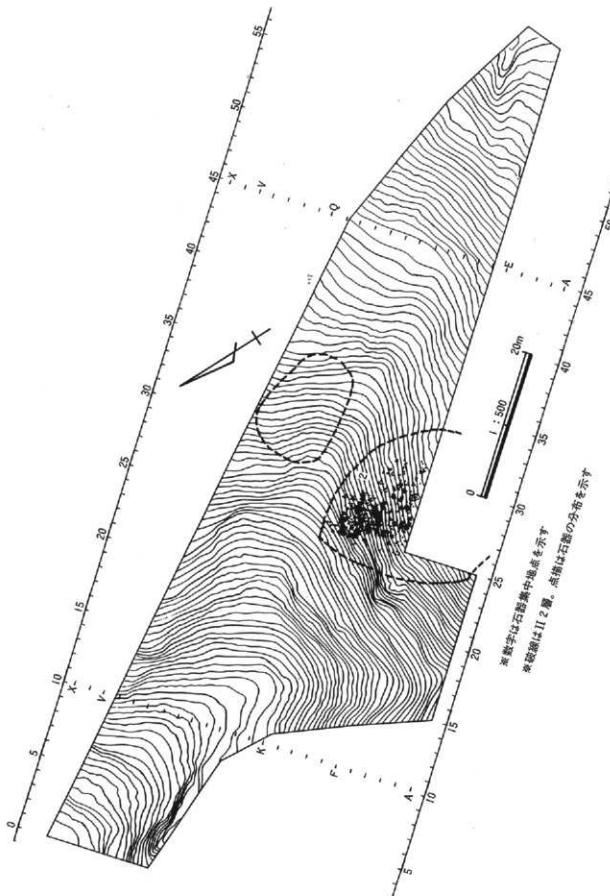
また、石器計測表で、備考欄に石質が書いてあるもの以外はすべて頁岩である。接合資料図示に関しては、最初に接合状態を示し、その後は剝離の古い順に剝片をならべた（接合状態を示す番号の次の番号が剝離順が一番古い剝片で、番号順に剝離が進み、最後の番号の石器が相対剝離順の新しい石器である）。

遺物は32リットル入りのコンテナで、250箱出土している。そのほとんどはII 3 G層出土の石器である。また、接合資料はI層から7点、II 1層からは34点（そのほとんどはII 3 G層に含まれる）、II 3 C層からは2点、II 3 G層からは79点、II 4 C層からは19点、II 5 C層からは3点の接合資料が出土した。II 3 G層からは全体の約8割の資料が出土しており、石器集中地点の付近に多い傾向がうかがえる。II 3 G層の分布範囲の割に、接合資料が多く存在するのは、II 3 G層自体に存在する、石器素材となりうる円礫（頁岩）の存在が考えられる。19点の接合資料が出土しているII 4 C層については、II 4 C層に円礫（頁岩）が存在するとは考えにくく、II 3 G層に包含されている頁岩を石器集中地点1に運び込んだか、別の所から運び込んだと考えられる。

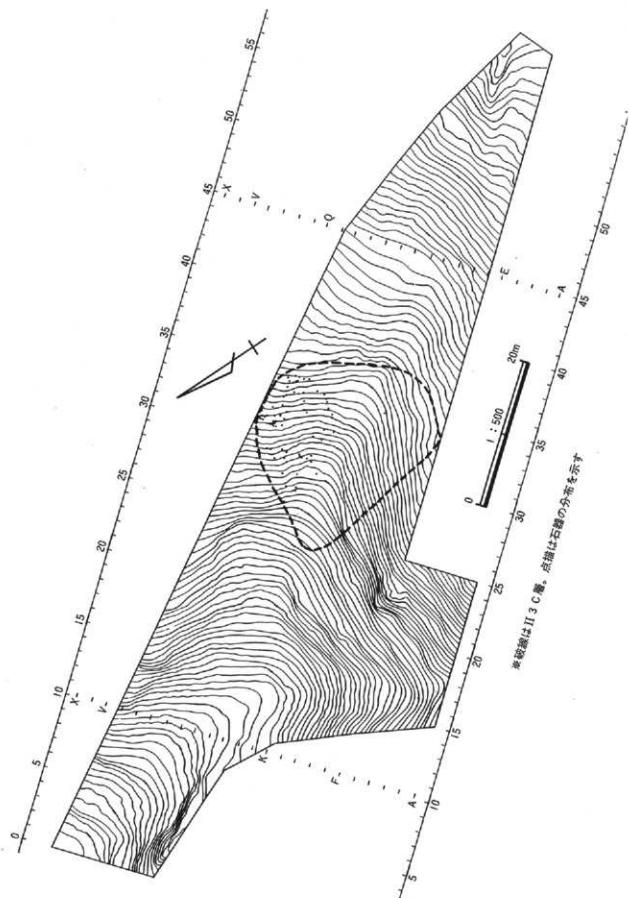
### 8 石器の分析について

第91図は、I～J-22～24グリッドのII 5 C層から出土した剝片すべての計測値をまとめたものである。剝片の長軸分布では、やや縦長傾向がうかがえる。打面の厚軸分布では、1:2付近に集中する傾向がうかがえるが、これといった規則的なものはうかがうことができない。剝離角に関しては100°～120°の幅にそのほとんどが集中する。以上のことを総合すると、全体として目的的な剝片剝離を行っているとは考えにくく、目的に合わせた剝離を行うというより、剝離した剝片に合わせて二次加工を加え、石器を作り出していること、遺跡の性格を考えた場合に、石器製作遺跡であるために、石器製作初期の段階の、原石の粗削や表皮の除去のための剝片が多いといったことが考えられる。

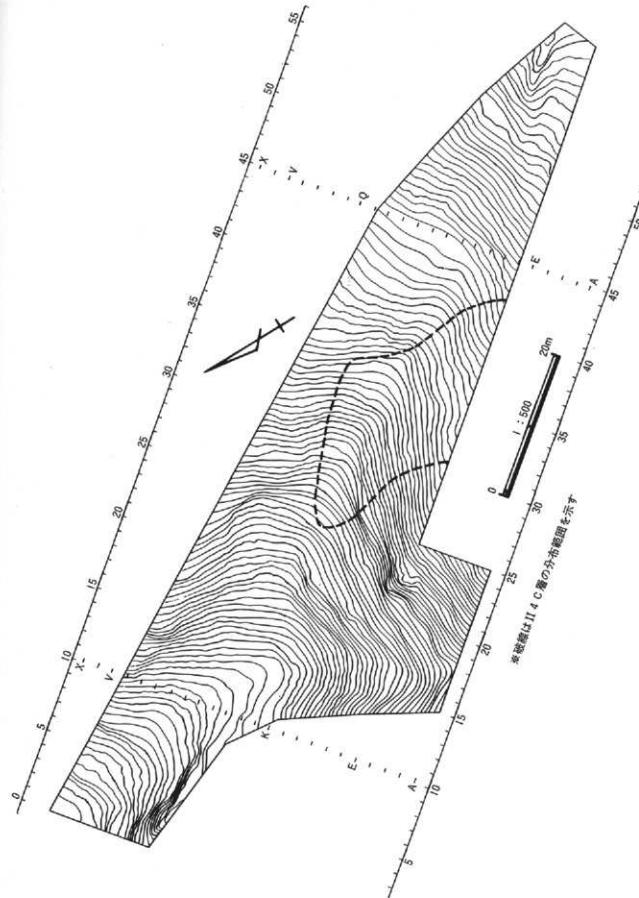
付録IIの東北福祉大学の伊東裕輔・梶原 洋両氏の使用痕分析では、26-1と27-2の石器について分析をお願いした。26-1の石器については、両面体石器の完成品。27-2については、肉眼観察で擦痕と光沢が見られたので分析をお願いした。その結果は、二つとも使用痕が見られないということで、二つの石器とも未使用の状態ということがいえる。使用痕分析を行った資料は、富山遺跡出土石器の中のたった2点のみであるが、ほかの石器についても、見かけは完成品と思われても、実際は未使用の石器が多いと思われる。



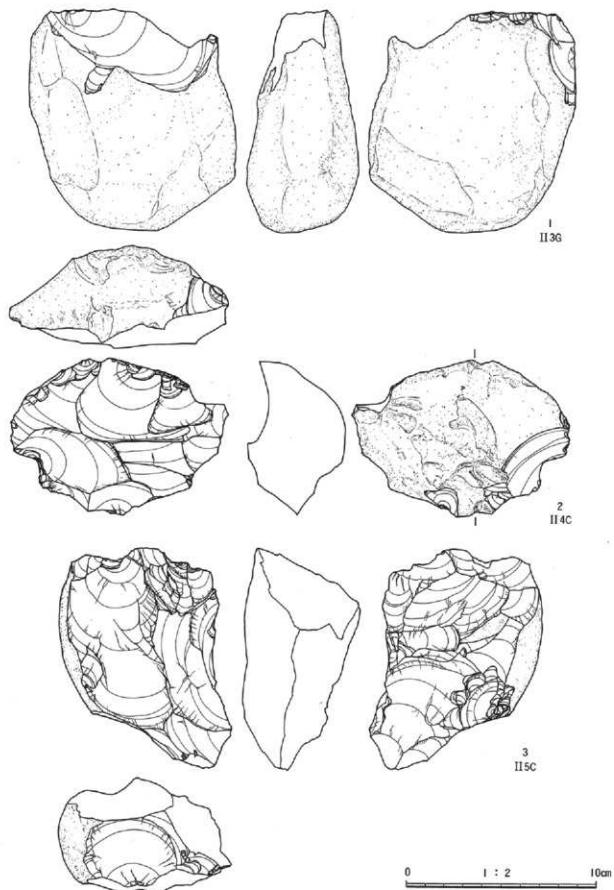
第75図 II 2層遺物分布図



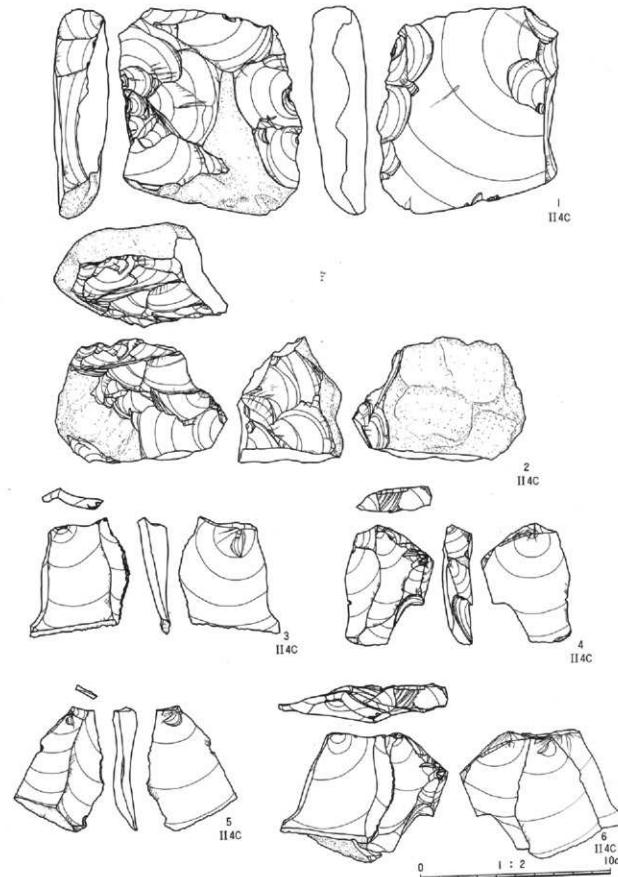
第76図 II 3 C層遺物分布図



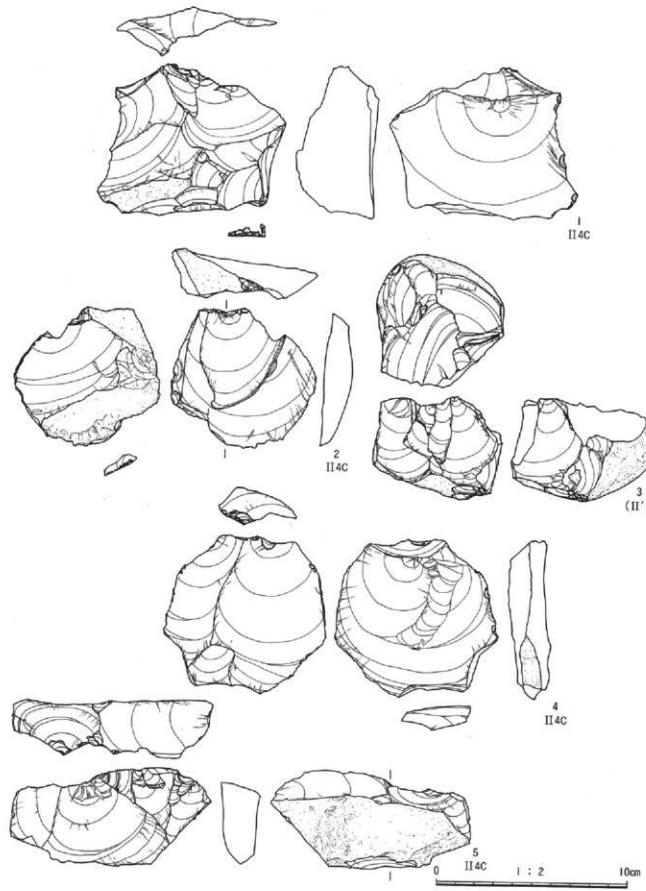
第77図 II 4 C層遺物分布図



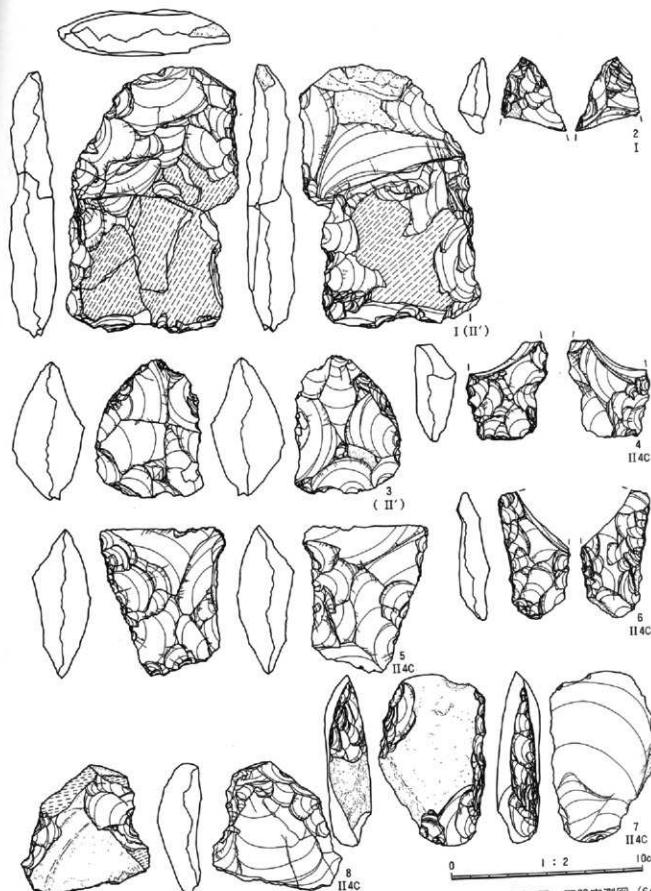
第78図 石器実測図 (61)



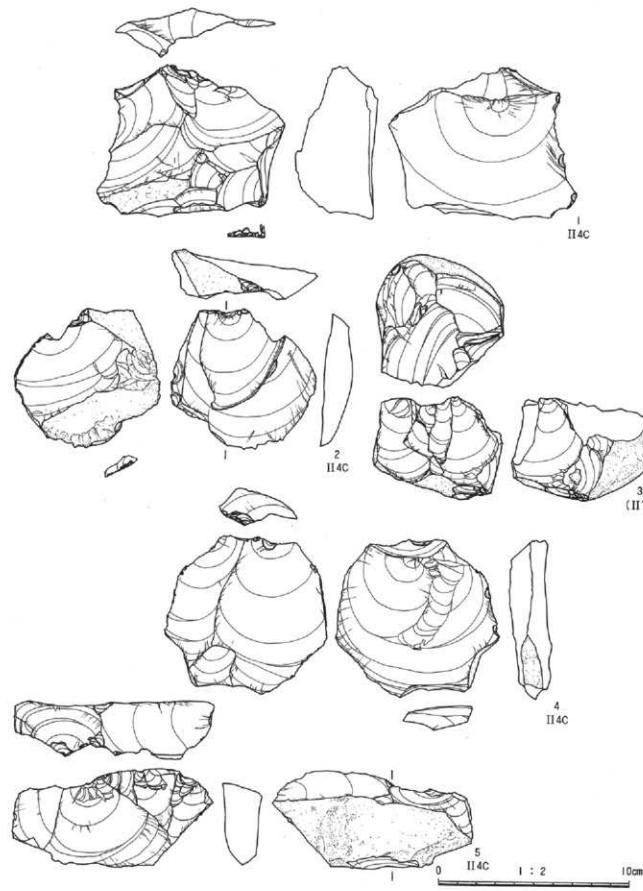
第79図 石器実測図 (62)



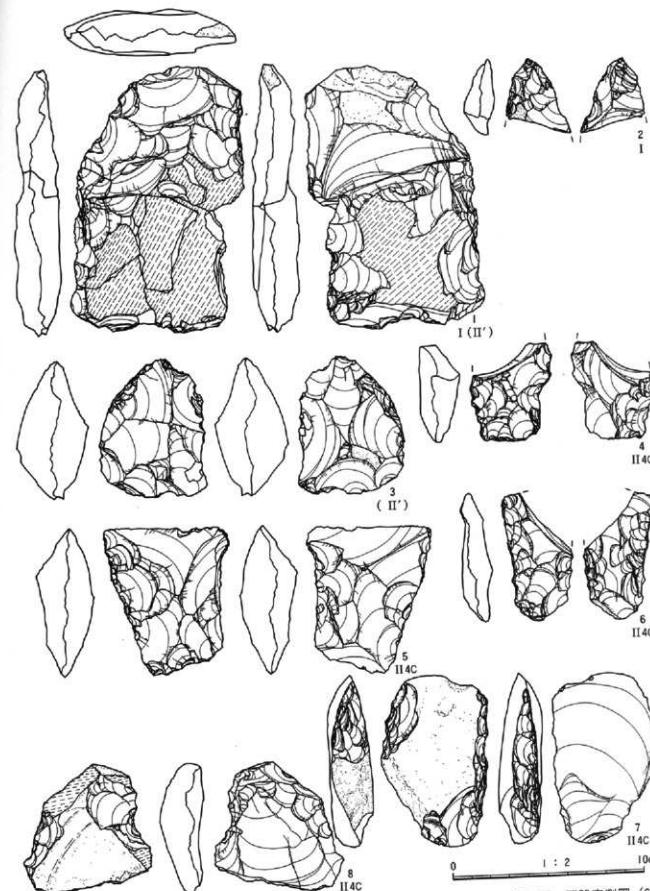
第80図 石器実測図 (63)



第81図 石器実測図 (64)



第80図 石器実測図 (63)



第81図 石器実測図 (64)